

サンディニスタの選挙勝利は不正選挙でなく貧者の生活向上を評価されたから：労働者階級がデマを暴く

イエダーR. ラヌーサ (Yader R. Lanuza、カリフォルニア大学で社会学を教えるニカラグア人研究者) 著、脇浜義明訳

原典：MRonLine (『マンスリー・マガジン』ネット版)、2021年12月6日

ラテンアメリカで極右が新しい衣を着て台頭している一方で、ペルーやボリビアなどで左派が選挙勝利するなど「第二のピンクの潮流」と呼んでよいトレンドもある。最近のニカラグアのサンディニスタ民族解放戦線 (FSLN) 政党政権の選挙勝利のレポートを訳出する

— 訳者

労働者階級がよくある嘘を解説、論破する

事前の世論調査どおり、ダニエル・オルテガ率いるサンディニスタが11月7日選挙に勝利した。この選挙はサンディニスタ政権の国政運営を評価する国民投票のようなものだった。人民、特にニカラグア領の片隅の被差別人民を助ける社会政策に公的投資をしてきたオルテガ政権は、1980年代にFSLN政権が第二のキューバになることを恐れた米国から敵視・干渉されたのと同じように、米国とその支援を受けた右派 (コントラ) から敵視されている¹⁾。



びっくりするほどサンディニスタ政権続投支持数は大きかった。有権者の65%が投票場へ足を運び、そのうちの75.9%が FLSN およびその同盟関係候補者に投票した。この勝利は、予想通り、米国とその同盟勢力の攻撃を招いた。彼らは不法選挙キャンペーンをはった。米国、カナダ、EU, OAS (米州機構)、及びその代理勢力は「ニカラグア国民」のための行動と称して、サンディニスタ政権の国民への貢献を破壊しようとしている。11月7日選挙で国民の意思が明らかになったのに、その意思が米国の好みに反するので、国民の行った投票を「違法」「インチキ」「強制による投票」と不当に中傷しているのである。

この米務省主導のデマ・キャンペーンに学者やジャーナリストなど西側の「帝国主義国左派」(imperial left) までが乗っかり、ニカラグア人民の選択を中傷し、反サンディニスタ合意を形成しようとしている。彼らはニカラグアに対する経済的・政治的攻撃を正当化するが、攻撃の犠牲になるのは労働者階級である。特に注意したいのは、学者も記者も「帝国主義国左派」もニカラグア現地へ行って直接農民、労働組合員、先住民、低所得層の人々と話し合ったことがないことだ。選挙のことや、選挙に関する意見を聞いたわけではないのだ。しかも、直接民衆取材したメディアの報道を意図的に無視していることだ。

米政府のプロパガンダをオウム返しする記者たちは、英国で唯一の社会主義的新聞である『モーニング・スター』の編集者スティーヴ・スウィーニーがメキシコ政府に身柄拘束されてニカラグア取材を妨害された事件をまったく取り上げなかった。主流メディア記者は現場から遠く離れたところから、不法選挙だったと、何一つ具体的証拠も示さずに、報道し、ニカラグアを独裁国生き地獄のように描いた。ある「左派」メディアと自称するメディアは隣国コスタリアの右翼の意見だけを鵜呑みにして報道した。ニカラグアの労働者の意見を聞こうとすることをしなかった。



Steve Sweeney, right. (Source: peoplesworld.org)

このような似非ジャーナリストと異なり、私はニカラグアの工場労働者、家庭内労働者、

専業主婦、トラック運転手、農民、エステリ市近郷の地域指導者などに直接会って取材した。エステリ市では複数の国際選挙監視団の監督下で自由で公平な選挙が行われた。さらに私はサンディニスタだけでなく、サンディニスタでない人々の意見も聞いた。

以下私はサンディニスタ政権が多数の選挙民から支持された理由、及びサンディニスタ政権に対する苦情や注文など、取材から得たものを論述する。西側メディア、「帝国主義国左派」、介入主義諸政府が流す決まり文句的プロパガンダではニカラグアの真相、文化、国民の意思をまったく伝えていないし、何故サンディニスタ政権が勝利したかの説明も提供しない。

棄権：エステバンの場合

投票前夜にエステバンを取材した（以下取材した人物名は仮名である）。彼はサンディニスタではない — そういう政治的なものとは程遠い人物だ。どんな仕事でもやる便利屋稼業で暮らしているブルーカラー労働者で、サンディニスタ政権支持者ではない。彼はニカラグアの税金が高いと不満を言った。これには私は驚いた。彼のような不定期労働者は国税庁への納税 — 15%の所得税 — をしていないからだ。

彼は所得税の上限を7%にすべきだと言う。私が、税金は社会福祉支出として国民に還元されるのではないかと言うと、彼はそれを認め、社会福祉プロジェクトが国民の役に立っていることも認めた。認めたが、何かの形でいちゃもんをつけた。例えば、病院などの公共施設を利用しない人の税金が病院建設や運営に使われるのは納得できないと不平を言った。

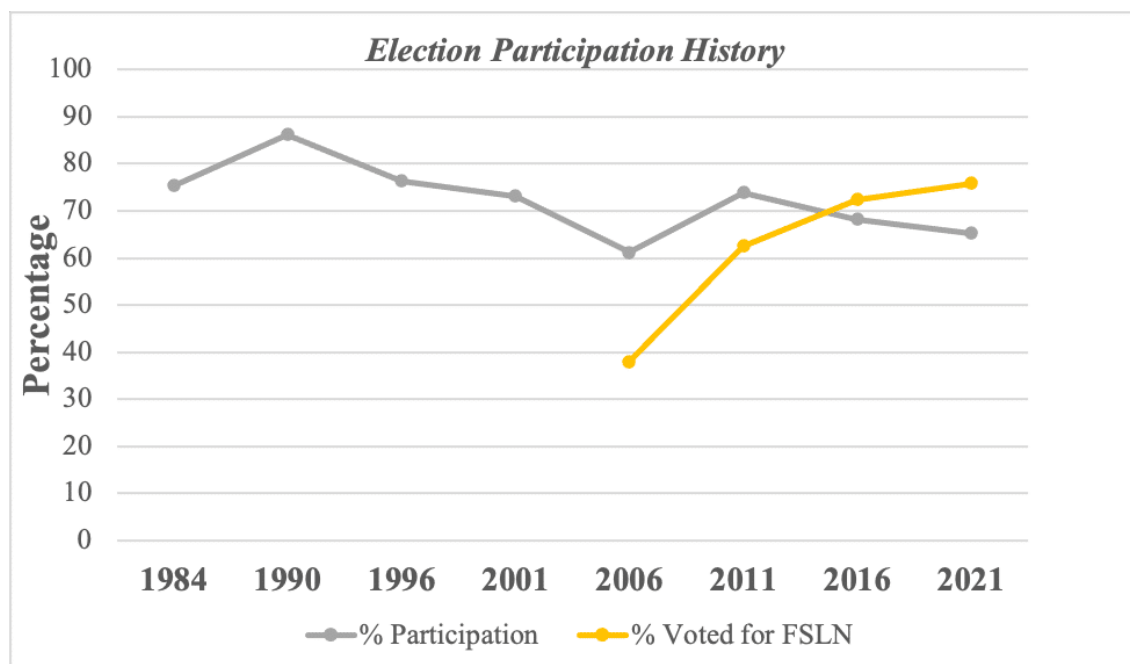
公共サービスなんか要らないと言っているのではない。むしろ彼は公共サービスを必要と思っている。ただ、公共サービスを利用しない人のカネが公共サービス維持に使われるのが不公平だと言っているのである。実際、彼は以前に事故に遭って、公立病院で無料で手術を受けたことがあった。彼の意見を聞いていると、「すべて政府の社会的支出は悪」と主張する米国の一部の右翼を思い出した。それはともかく、ここで注意すべき点は、エステバンが選挙を棄権することである。

エステバン事例から見えること — 棄権に関する神話と現実

エステバンの件から書き始めた理由は、サンディニスタ勝利に対する攻撃の一つが政府の政治的抑圧で大量の棄権が生じたというプロパガンダだからである。明らかにデマ・プロパガンダである。エステバンは対政府不満を持っているが、そのために抑圧されていると言わなかったし、そもそも不満と不平を大声でしかも自慢げに語った。脅迫や抑圧のために投票を棄権したわけではない。政治や政府に関する彼の考え方全般、特に現政府の公的社会支出に関する彼の考え方から発する行為だった。

今回の選挙における棄権は、米国の支援を受けた野党が言うような大きいものではなかった。FSLN が政権復帰してからの投票率は確実に安定している — 61%(2006年)から73%(2011年)と推移。それ以前のネオリベラル政権時代(1990~200

6年)には常に投票率が低かった。今回の選挙の投票率は65%である。



主流メディアや「帝国主義国左派」が繰り返し主張している棄権率80%はまったく根拠のないデマである。作家のベン・ノートンは、80%棄権率を報告した団体「ウルナス・アビエルタス」(開いた箱)のことを調べた。実に出鱈目な団体で、西側政府からカネをもらって活躍するたった二人の右翼政党员が構成する形だけの団体で、しかもこの二人は選挙監視に関する専門的知識も経験もない人物であった。このような実体のない無責任な団体が独立した正式組織の装いをして、米国のニカラグア政権交替政策の下請け活動をしているのである。

サンディニスタ政権への「ソフトな」支持

カルロスは運転手、ユーニエルとヨエルは工場労働者。彼らは、選挙について私が質問する前は、ほとんど政治について語らなかった。たまたま政治に触れるときは、たいてい批判だった。私はてっきり彼らが野党支持者だと思い、彼らの考えを知りたいと思って取材した。

私の予測が間違っていた。

ユーニエルの政治的関心は主として納税に関してあった。十分な給料でないのに、そこから所得税が引かれるのに不満があった。残業して多く稼げば引かれる税金が多くなる(所得税率は一定)のがフェアじゃないと考えているようだ。どうやら彼は税金が社会サービスとして還元されるなどのつかいかたを知らないようで、その不満は無知からきているように思えた。カルロスは政府が行うインフラ事業で働く下請け労働者である。彼は、サンディニスタ政府は良いことを行っているが、カルロスの気に入らないことも行っている、しかし、自分は様々な考え方をする人々と一緒に働いているので、あまり自分の意見は言わないようにしている、と語った。仕事はよいし、賃金もよいと彼は言う。もし政権が野党に渡れば

公共投資が減り雇用と経済が悪化するだろうと、彼は心配しているが、それをあまりしゃべらないようにしていると言った。ヨエルもあまり語らなかったが、投票日前夜には、オルテガ大統領の政治はよかったと、それは認めざるを得ないというような口調で言った。カルロスと同じように、野党政権になったら公共投資事業が減ると言った。

この三人はサンディニスタ政府を好きではないが、野党が政権を握ったら社会的投資が減るという理由で、ダニエル・オルテガの再選を支持したのである。



サンディニスタとその活動への「ソフトな」支持

ユーニエル、カルロス、ヨエルは FSLN に対する「ソフトな」支持の実例である。国内外の反対派はサンディニスタを無力化して息の根を止めるためにオルテガ追放を願い、彼と彼の家族を悪魔化するキャンペーンを展開してきたが、不首尾であった。ユーニエル、カルロス、ヨエルのようにサンディニスタ支持層ではないが、サンディニスタ政府の功績を認める国民が居たのだ。オルテガ以外の人物を大統領にしたら、公的投資をしないで国富を盗むだけだという恐れが国民の間にあった。国民は医療や教育などの社会投資を重要と考えているのだ。私は、公衆衛生事業が民営化されたらどうなるだろう、とカルロスに質問した。彼は、民営化は絶対に起きないと即答し、もしそんなことになれば民衆の反乱が起きるからだ、と言った。つまり、あれこれ不平を言いながらもこの三人はオルテガのサンディニスタ政府の再選を支持したのである。ユーニエルに関しては、私は、もし選挙に行ってもサンディニスタ政権支持の投票をしないものと思っていたが、サンディニスタ政権と同盟関係にある候補者に投票したのであった。

このような「ソフトな」支持のおかげで FSLN の 75.9% という高支持が成立している。ジャーナリストのウィリアム・グリスビーは、サンディニスタの固定支持票よりも多い「ソフト支持票」が入った選挙区もあったと指摘している。例えば南カリブ自治地域 (Caribe Sur) 8 市の内の 6 市、パイワス、リオーグランデ河口地帯、コーン島、パール・

ラインなどがそうだった。全国的にもサンディニスタ以外の人々がオルテガに投票したともグルスビーは書いている。

私が取材したファノールはこの現象を「進歩票」(voto progreso) — サンディニスタ政権がニカラグアに貢献し、ニカラグアの方向を規定したことを社会的進歩と認める票 — と呼んだ。これに対して「イデオロギー票」(voto ideologico) と呼ばれる票がある。これは、サンディニスタ政府の社会主義的政策そのものを支持するだけでなく、サンディニスタの反帝国主義的的革命政策、米国がニカラグアと世界に押し付ける野蛮な資本主義に抵抗する政策を支持する票のことである。選挙直前の信頼すべき世論調査によれば、FSLN に対する「ソフトな」支持票は支持票全体の17.4%であった。それに加えて FSLN に好感を持って同党に投票する層(4.5%)と、FSLN を強く支持する層(53.4%)があった。つまり、選挙での FLSN 支持は70%を超えると予想された。そして11月7日、FSLN は最終的に75.9%の得票率を獲得した。

前述のユーニエル、カルロス、ヨエルが「ソフトな」支持票を代表する。サンディニスタ政府の考え方に一致しない意見の国民も政府の社会政策がニカラグア国民に恩恵をもたらしていることを認めて、選挙で支持票を入れたのである。



米国が支援する野党のデマ宣伝

CID ギャラップ (国際的に有名な世論調査会社ギャラップとは無関係) は出鱈目な選挙予想を行って反サンディニスタ勢力への武器提供とした。何度も行われたM&Rコンサルタントの世論調査結果とまるで異なり、CIDギャラップはたった一度だけ「調査」を行い、オルテガ支持は僅か19%にすぎないと発表した。党员証を持った200万人のサンディニスタの存在やユーニエル、カルロス、ヨエルのようなサンディニスタではないがサンディニスタ政府を支持する人々を見ようとしない「調査」、オルテガの「ハード支持票」と「ソフト支持票」を完全無視する、調査とは呼べない「調査」による予想であった。

私が取材した人々の中には、クーデター未遂暴動で逮捕されて獄中にある野党指導者に

同情する人は一人もいなかった。米国から資金援助を受けるこれら野党指導者は西側諸国からもてはやされているが、ニカラグア国内では民衆の人気も支持もない。仮に獄中指導者が選挙に立候補したとしても、何の変化も起きなかったであろう。この派の野党は、ごく僅かの大金持ちを除いて、国民の間ではまったく人気がない。

西側メディアは的外れの報道をしてきた。私がインタビューしたニカラグア人は誰一人（あのエステバンも含めて）獄中の暴力分子への支持も同情も表明しなかったのに、西側の主流メディアと「帝国主義国左派」は、全く現実離れして、彼らを「有望な大統領候補」になり得たと評したのである。それが現実にはまったく嘘であることが何度明白になっても、まるでゾンビーのように何度も現れるのだ。

米国支援の野党に国民的支持がない理由

米国が応援する野党の支持の低さを理解するには、二つのことを考えるとよい。一つは、野党にまとまりがないこと。権力欲に駆られて内部争いばかりして、まともな連合体も形成する能力がない。サンディニスタ政府への憎しみと米国のカネ依存だけが共通項の勢力である。

この実状に不満を持った米国はクリスティアナ・チャモロ・バリオスに的を絞った（他の人物はそれを妬み、悔しがった）。彼女をニカラグア版グアイド²に仕立て上げる画策を行った。米国大使や大使館員やそれに追従するニカラグア人たちのパーティのビデオを見たが、人々は彼女を「チャモロ大統領」と呼んでいた。彼女を使って政権交代を図ろう（彼女を選挙に立候補させるのではない）とするむなしなあがきが見え透いたパーティであった。



Cristiana Chamorro, the Nicaraguan Guaidó that never was. (Source: npr.org)

チャモロ担ぎの画策は潰れた。彼女の不正行為が明るみに出た³、彼女は自宅軟禁処分となった。

もう一つの理由の方が重要である。現在獄中にいる（または外国に逃亡している）野党指導者は2018年クーデター未遂暴動で国を荒廃させた暴力犯である。このためサンディニスタ政府に批判的意見を持っている人々でさえ、外国の支援で暴動を起こした野党指導者の味方をしないし、収監されて当然と思っている。

2018年クーデター未遂暴動⁴はニカラグア国民に大きな被害を与えた。経済的、心理

的、社会的被害が大きく、特に貧困層の辛酸が大きかった。経済的損失は約240億ドルにのぼり、中央・地方の施設の損傷が2億650万ドル、8708の商店や小企業が潰れ、119000人が職を失った。その後遺症で国民の間には暴力を疎む気持ちが強い。2018年にはハリケーンで破壊される経験をしたので、政治的傾向の如何を問わず、暴力的なものを否定する気持ちが国民の間に強い。当時私はニカラグアにいたので、クーデター未遂暴動が国民の心に与えた傷は実感できた。



Scene from the violent 2018 U.S.-backed coup d'état attempt against the Nicaraguan government. (Source: nytimes.com)

農民のダントは、もう一度暴動を起こしたがっているのは大金持ち、特にCOSEP（ニカラグア商工会議所）のメンバーだけだと言う。金持ちは暴動による破壊を乗り切れる財力があり、損害（破壊による損害があったとしても）をすぐに回収できる。だから、COSEPは2018年暴動を公然と支持した。



Nicaragua's business elite supported the 2018 coup attempt. (Source: todaynicaragua.com)

仮にあのクーデターが成功していたら、COSEPは大きな政治的・経済的権力を手に入れ、国民から富を吸い上げることができたであろう。（上流階級を代弁する野党系新聞は新たな暴動を望む声を掲載している）

投票日には民衆の暴力を望まない空気が充満していた。実際、投票場で暴力があったという報告は一つもない平和な選挙であった。暴力分子の獄中野党指導者が立候補していたらオルテガに勝っていただろうという西側メディアの報道は大嘘であった。ニカラグアの人たちは、彼らが提供するものを欲しがっていないのだ。

サンディニスタ政権への「ソフトな」支持から学ぶべきこと

ユーニエル、カルロス、ヨエル、エステバンらの「ソフトな」支持には大切なことが表現されている — 医療は無料で提供されるべきもので、基本的人権だという考え方。この考え方はサンディニスタ革命第二局面の14年間の間にニカラグアに定着した。

ニカラグア人は無料の医療を当然のことと思うようになった。また教育も医療と同じように基本的人権だとする考えも普及している。これらの公的サービスを民営化しようとするれば、大きな抵抗が生まれるだろう。非サンディニスタも抵抗するだろう。無料公的サービスは社会的に定着しているからだ。



Nicaraguan nurse ready to prepare test. (Source: wikipedia.org)

ニカラグア人は米国人のように医療に多額のカネを使わないですんでいる。米国で永住権やグリーンカードを持ち、経済的にもそれなりに成功している右派ニカラグア人も、病気になると治療費の高い米国を避けてニカラグアで治療を受ける。無料医療を提供するサンディニスタ政府を潰そうとしながら、恩恵だけはちゃっかり頂くのである。

「ハード票」と選挙勝利戦略

ビルナ、ユリアナ、ファノールは地域のリーダーで、サンディニスタの「ハード票」、選挙を通じたサンディニスタの平和革命の中核を構成している。

ビルナはサンディニスタ派の家庭で育った家庭内労働者である。自分の戦闘性を親譲りの遺産と見ている。オルテガの貧困者に寄り添う政治を支持し、守らなければならないと思っている。私がインタビューしたサンディニスタの人々（直接政治に関与している人もそうでない人も）はみんなその同じ思いを語った。

ビルナは FSLN の日常活動が選挙に備える戦術であることを説明してくれた。地域活動家としての彼女の仕事は、投票場を手伝う人を見つけることだった。投票場の安全を確保し、

必要なもの（例えばコーヒ）を準備した。彼女自身は、FSLN リーダーであるために、投票場で仕事をするのは規則違反になるので、それができなかった。

彼女と仲間は、投票に行きたいが移動手段がない高齢者や障害者の便を図る仕事を担った。彼女は FSLN が勝利することを微塵も疑わなかった。国民が無料公的医療など国民に役立つ政策にブレーキをかけるなんて思いもよらないからだ。ファノールも同じ意見だった。

ファノールは若いリーダーである。彼は FSLN の戦略は「家庭に寄り添う」(ccompañiamient a las familias) という単純なものだと説明してくれた。家庭が必要とするものを得る手伝いをするだけのことである。選挙期間中だけでなく、常日頃から行うので、常にサンディニスタのプレゼンスが各家庭で感じられる戦略となるのだ。具体的には高齢者に車椅子を提供したり、困窮者に食料を届ける活動である。その他にも、プラン・テチョ (Plan Techo,) (地震被害世帯に建材を提供するプログラム)、地域清掃、墓地管理、葬儀関連費用の援助、ワクチン接種と情報提供、共同住宅建設、安全な飲料水提供、貧困農民救援 (Bono Productivo) (女性農民に豚、鶏、牛を与え、食糧主権と経済的自立と高めるプログラム) などがある。



Plan Techo in action. (Source: lavezdelsandinismo.com)

これらは「家族に寄り添う」プログラムの一部だとファノールは説明した。他にも、経済成長を刺激し、食糧主権作りのために様々なプロジェクトを行っているが、ビッグ・ビジネスに依存する経済成長策はとらない。FSLN は中小企業を主体とする経済自立を目指しているので、ファノールはそれをデータを示して説明した。

サンディニスタの「人民経済」推進政策 — 基本的に家族、地域、共同組合、組合や協会 (中小農民や企業の) の生産活動に依存する経済 — は、2018年のクーデター未遂暴動以降顕著になった。それ以前にもそれに力を入れていたが、どちらかという国富生成に関しては資本家階級への依存が高かった。

ファノールはまた FSLN の基本的戦略として家庭訪問をあげた。地域住民は公式の場では不満を全部吐き出さないが、家庭訪問のようなプライベートの場では政府への注文を率直に話すからだ。



Nicaraguan farmer. (Source: tortillaconsol.com)

それでファノールとその仲間が地域社会の人々 — 政治的色分けをしないで — と地域FSLN事務所との間のパイプ役の働きをしている。彼らが提供する政府サービスは住民の政治的傾向の如何を問わず平等に配給される。専業主婦でFSLNの地域リーダーであるユリアナもその点を心得ている。

ユリアナは、自分の家族の世話をしながら、政府援助をそれを必要とする地域住民（政治的傾向に関係なく）に届ける役目を担っている。彼女は、1979年にソモサ家の独裁政権を倒したサンディニスタ革命に感動して、それ以来ずっとFSLNの活動をしている。

彼女の母親も長年のサンディニスタ派である。彼女がリーダーの位置につけたのは、FSLN がジェンダー平等に取り組んでいたからであった。FSLN は2021年にアメリカ両大陸でジェンダー平等ナンバーワンと国際的に認められた。彼女によれば、FSLN の政権復帰前には政府からの援助はほとんどなかった。彼女は2007年以来多くの政府プロジェクトを地域に伝える仕事をしてきた。最近では彼女が住む町に電気が通るプロジェクトに関わった。この電化プロジェクトでサンディニスタも非サンディニスタも恩恵を受けた。他にもプラン・テチョなど彼女に関わったプロジェクトから恩恵を受けた。「リベラル」 — 野党の一部を支持する人々 — も恩恵を受けた。このリベラルは政府機関にも雇用され、その地位を利用して反政府活動を行うので、サンディニスタの中に彼らに対する怒りの声がある、と彼女は語った。

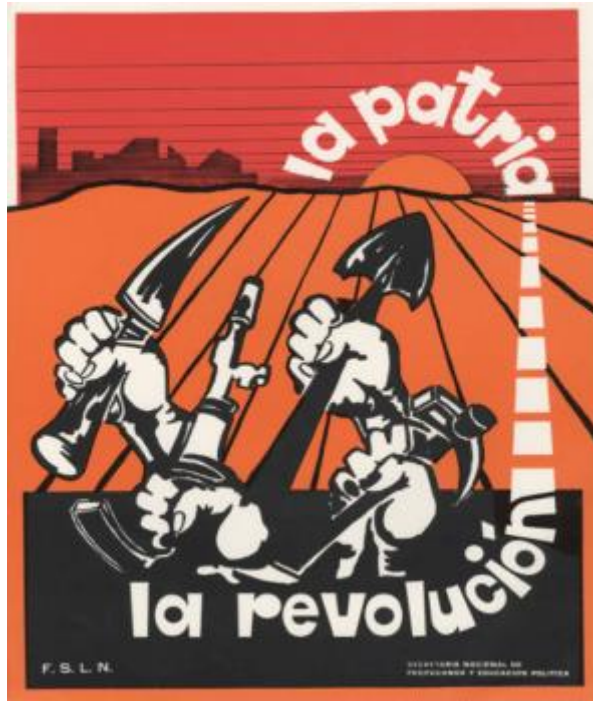
ビルナ、ユリアナ、ファノールの三人は、それぞれ自分の居住地域では自由で公正な選挙となり、FSLN が勝利することを確信していた。うちの地域の人々は午前の教会の礼拝を済ませて午後投票場へ行くとユリアナ。一部の野党が選挙ボイコットを呼びかけ、その系列のバス会社がバス運行を取りやめたが、ほとんど影響はなかった。投票場が多くあり、人々は歩いて行ったり、車を相乗りして向かった。

一般サンディニスタ

エレナ、ダント、タモというサンディニスタ支持者も取材した。ヘレナとタントは党員だ

と言ったが、そういわずにタモも党員に違いなかった。みんな選挙の重要性を指摘した。

ダントは、ソモサ独裁時代には票は5コルドバのカネ、ナカタマル（ニカラグア郷土食）一食分、酒小瓶で買収されるのが普通だったと思い出して話してくれた。サンディニスタはそういう悪癖を一掃した。最貧国民に識字教育、社会的権利意識教育、自尊心を高める教育を行い、政治界の汚職摘発・撲滅に力を入れた。



Sandinista revolutionary poster. (Source: notevenpast.org)

ダントは、サンディニスタが貧しい人たちと結びつき、その組織力が強いので、米国や野党の政権転覆試みは成功しないだろうと自信に満ちて語った。エレナも、サンディニスタが病院、学校、住宅、社会保障給付を国民に提供したが、そんなことはネオリベラル時代にはなかったと語り、それが政権の安定につながっていると説明した。エレナの子どもは貧困農民救援を受け、経済自立と食料主権を支えるために土地を耕す教育を受けた。人民の支持がある限りサンディニスタ政権は潰れないと彼女は言った。初老女性のアナはサンディニスタは良心的な人々で、その統領のオルテガが困っている人を助ける善人だと語った。エル・コマンダンテ（司令官、オルテガ）への敬愛の念はアナだけでなく、多くの人が表明している。アナはソモサ時代には選挙に行かなかったが、革命以降は必ず投票している。タモは私が取材した中で最も貧しい人のようであった。彼は一種の小間使い、農地に住み込みで雇われ、耕作をするだけでなく収穫物が盗まれないように番をする守衛の仕事をしている。口数が少ない人で、インタビューに応じてくれたが、今までインタビューなどされたことがない人だった。

彼は病院建設を喜んだが、それより遠く離れた僻地である出身地にサンディニスタ政府が道を作り、14年間それを整備していることを熱心に語った。道路のおかげで地元民は生

産したものを運んで売ることが出来るようになり、大助かりだ、と言った。

彼は故郷へ戻って投票したかったが、仕事のためにできなかった。同じように米国へ出稼ぎに行っている一般サンディニスタも投票できなかった。もし彼らも投票できていれば、オルテガ支持票はもっと高くなっていただろう、とユリアナは言った。

米国支援のクーデター未遂暴動と FSLN とその同盟者の選挙勝利

ビルナ、ユリアナ、ファノールはみんな2018年クーデター未遂暴動の後 FSLN の組織がより強固になったと言っている。三人ともあの事件で苦しい目にあった。ファノールは SNS で袋叩きされたと言った。彼は、自分と同世代の若者の中に最初偽のプロパガンダに取り込まれて暴動に乗ったものが居たことにがっかりきた、と言った。三人は家族や知人が雰囲気にもまれてバリケードに加わったり、その近くへ行って被害に遭わないように働きかけた。そんなことになれば、家族や地域の分裂を招くからだ。幸い彼らの地域では暴動やバリケードに加わる人は少なかった。彼らは必死になって米国のカネをバックにして野党がばら撒く嘘を消す活動を行った。

ファノールは、暴動によって多くの方は仕事にも行けず、通院もできず、大切な用事もできず、建物や道路や商店が破壊され、経済的損失がどんどん膨れ上がっていくので、このクーデターは成功しないと思っていた。中小の商店や企業が多く廃業に追い込まれた。地域住民は暴動に恐れると同時にそれがもたらす破壊に怒った。

ビルナはプロパガンダに踊った隣人から攻撃された。これまで政治的傾向に関係なく住民たちに社会サービスを提供する活動をしてきたから、一部とはいえ住民からの敵視には驚いた。一時期は FSLN の地域リーダーを辞めようかと思ったときもあったが、思い直して任務を続けた。それに仲間たちが守ってくれた。彼女は地域の有名人だったから、野党の武装雇用兵に襲撃される恐れがあったからだ。全国的にもサンディニスタに対する襲撃が頻発していた。

サンディニスタ党员やシンパは罵声を浴びせられ、殴られ、負傷を負わされ、殺害された。家などを破壊された者もいた。ビルナは暴動中は本当に怖かったと言った。近所の若者が野党の雇い兵に背中を撃たれて死んだなどのニュースを聞くたびに、泣いた。彼女の話を知っていると、この暴力への抵抗で女性が大きな働きをしたことがうかがえた。

ユリアナも暴動の中で恐怖に怯えながらも地域リーダーとして頑張った。バリケードが各所にあったので市中には出ないようにした。それでも出勤しなければならず、武装雇用兵とすれ違うときは恐ろしかったと語った。

米軍が画策し扇動したクーデターが招いた暴動だという証拠は山ほどあるにもかかわらず、西側メディアと「帝国主義国左派」はそれを認めなかった。米国の代理人となった暴徒から被害を受けた人々の悲劇を見えないようにし、そんな被害はなかったかのようにしたのである。そういう連中には、クーデター未遂暴動の後 FSLN が組織と住民との結束を強め、その結果として選挙を勝利したという経緯を理解できないのだ。

結語

一般のニカラグア労働者の取材の中で、私は、彼らがサンディニスタ革命の第二局面を圧倒的に支持していることを発見した。それは、サンディニスタ政府に若干不満を持ち、野党の SNS や新聞のプロパガンダに影響されることがある人々についても、同じである。

サンディニスタも非サンディニスタも 2007 年に政権復帰したサンディニスタの業績を否定しない点で同じである。さらに、サンディニスタ革命の第二局面で社会が大きく変化し、政府が提供する公共サービスを決して民営化すべきでない基本的人権と見ることも、社会的に成立した。

とりわけ医療サービスがそうである。政府の医療インフラやプログラムへの投資のおかげで、政府への支持が高まった。最近保健省が新型コロナ・ワクチンの家庭訪問摂取を始めたが、これはワクチンを接種したいが何らかの理由で摂取会場へ行けない人々のためである。

西側メディアや「帝国主義国左派」は、私が取材したような労働者階級の人々の意見を取り上げない。米国と米国の走り使い野党が流す談話と一致しないからだ。ニカラグアの労働者の意見は、米国の「帝国主義国左派」に「エサ」を提供する今は姿を消した「サンディニスタ革新運動」(MRS) のメンバーが流す談話とも一致しない。ウィキリークスが暴露した米國務省電報は MRS 指導者が米国の密告屋であることを明らかにした。MRS 指導者たちは自国へ経済戦争を仕掛けることを米政府に公然と要求したのである。しかし彼らは国際社会に対し自らを左翼として表明し、実際はニカラグア右翼と米帝国の野望と繋がっていることを隠蔽した。

米国の「帝国主義国左派」は MRS 指導者の言うことを人民の声とし、私が取材したような庶民の声を無視する。「帝国主義国左派」が「ニカラグア人民のため」と言うとき、その本当の意味は「友人である MRS やニカラグア上流階級のため」ということである。

サンディニスタの選挙勝利を理解するためには社会の階級的分析が重要である。FSLN の勝利は労働者階級の支持があったからである。

西側メディアと「帝国主義国左派」は、ニカラグア労働者階級がニカラグアの多数者であるにもかかわらず、彼を無視する。そして上流階級 — 米国のカネに寄生するエリート階級 — の考えを誇張して伝える。だから私は上流階級の人間を取材しなかった。

「帝国主義国左派」(Imperial Left) という用語に関して

私は、デヴィッド・ハーヴェイが中国を例にして富の西から東へ流れる現象をあげて帝国主義論では現代資本主義社会の説明をできないという考えに対してヴィジャイ・ブラシヤドが反論したことに倣って、この用語を使用した。帝国主義国の左翼が、その意図がどうであれ、ニカラグアの主権を認めず、左翼としての本来の姿を見失って、米國務省のニカラグア右翼を支援して政権交代を図る画策に組み込まれている姿を指摘するために、この用

語を使用した。

彼らは労働者階級庶民の声を無視しながら、もったいぶってニカラグア人民のために語ると言って、サンディニスタ政権は社会主義的でない、知ったかぶりして話し書くのである。

これは先進国左翼に昔からある典型的姿勢である。サンディニスタ政権が革命的であるかどうか、社会主義的であるかどうか、支持する価値があるかどうかを決めるのはニカラグア人民で、先進国の「エライ」左翼ではない。発展途上国の革命が不完全になることは往々にしてよくあることで、それを悪く言うのは簡単である。そんなことより、帝国主義国の革命妨害に反対し、ニカラグアのような国の労働者階級の声に耳を傾け、それから学んで帝国主義本国の社会主義化に努力するという困難な道に進むのが本来の左翼の姿であろう。

彼らは左翼の分裂を語るが、そんなものは信用するな。分裂なんかない。道を誤って帝国主義に加担する連中がいるだけで、反帝国主義左翼はニカラグアのサンディニスタを支持している。

私は「帝国主義国左派」がニカラグアの反政府友人と手を切って、米国の介入に反対する側につくことを呼びかける。「帝国主義国左派」は米国、EU、OASのニカラグア介入と政権交代攻撃で損害を受けることはなく、損害を受けるのはニカラグア人民、特に貧しい人民である。エステバン、カルロス、ユーニエル、ヨエル、ファノール、ダント、ユリアナ、ビルナ、エレナである。

米国の一方的な強制的措置はニカラグア人民を経済的に圧迫し、経済的生き残りを求めて米国などに移民する人が発生するかもしれない。サンディニスタの選挙勝利に対する米政府の芝居がかった反応のため、一部のニカラグア人は米国がニカラグア人移民を全部受け入れてくれると期待するだろう。経済制裁と政治的攻勢が移民が作り出す。移民は帝国の収穫である。



FSLN Celebration. (Source: radiolaprimerisima.com)

27か国から232の選挙監視団体がやってきて、その監視下で平和的で公正で民主主義的な選挙が行われ、全国的に祝福された結果を導き出した。

F S L Nは今後も地域へ足を運び、住民の不満、必要、要求に耳を傾けるであろう。国会議員もそれに参加するだろう。それは貧困を減らし、人民の生活の安寧を作り出すプログラムの一つである。ウィリアム・グリズビーの言う通り、今後数年先にサンディニスタ政権が14年間撒いてきた種の果実が実だろう。大きな前進が待っているのだ。サンディニスタ革命は進行中である。

1 オルテガは第三の道派で、資本家、宗教家、学生、中流階級、若者失業者、スラム貧民等広範な層による共同運動を提唱。他に農村部を基盤とする持久人民戦争派、都市部労働者を中心とする古典的マルクス主義のプロレタリア潮流派があるが、一時内部紛争があったが、現在は故サンディーノ [1895年・1934年。ニカラグアの革命家で、1927年から1933年にかけての駐ニカラグアアメリカ海兵隊に対する抵抗運動の指導者] の思想のもとに一致団結している。

2 ベネズエラでクーデターに失敗したグアイドは勝手に暫定大統領を自称し、米国等はそれを認め支持している。

3 彼女の財団が米国からのヤミ資金をマネーロンダリングしていることが検察によって摘発された。

4 政府の社会保障改革に反対する反政府暴動で、メディアは政府弾圧で300人が死亡したと報道したが、政府と市民連合との対話などを一切報道しなかった。